

陳亮の「事功思想」とその孟子解釈

著者	福谷 彬
雑誌名	集刊東洋学
巻	116
ページ	50-69
発行年	2017-01-25
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132768

陳亮の「事功思想」とその孟子解釈

福 谷 彬

はじめに

陳亮〔字は同甫、号は龍川。一一四三―一一九四〕は朱熹（字は元晦、号は晦庵。一一三〇―一二〇〇。以下、慣例に従って朱子）と「王霸義利の辨」という論争を行った人物として知られ、彼の学派は、しばしば「事功学派」と呼ばれる。朱子は、漢以降の世を尽く「人欲」の世としたのに対し、陳亮は、漢唐は三代と同じく「天理」の世であると主張した。

朱子はこの論争の中で、陳亮の主張を「義利雙行、王霸並用」と評して斥けたが、この語は『宋元學案』にも採用され、陳亮思想の特徴を端的に示すものとして広く知られる。また、近年の研究でも陳亮の思想を一種の霸道容認論と見なすものもある^③。

しかし、この語は飽くまで朱子の陳亮に対する批判の語

で、陳亮はそれを否定しており、陳亮思想を客観的に性格付けるものとしては適當ではない。本稿では、陳亮は少なくとも形式の上では朱子と同じく義と利、王道と霸道の弁別を唱え、義や王道を尊び、利や霸道を価値の低いものと見なしていることに注目する。

義利・王霸の語は『孟子』を典拠とするが、義利・王霸の弁別を説くこと自体が既に示しているように、『孟子』は一般的に、結果や利益よりも動機や道徳性を重んずる思想家と見られている。一方、陳亮の思想は事功主義、功利主義と評されるように、動機の善悪よりも功利の大小を重んずる思想と見られがちである。そのことから、これまでの研究では陳亮思想を孟子に対立するものと位置づけるものが少なくない^④。

しかし、実際には陳亮は若年から晩年に至るまで孟子を尊崇する文章を書いており、しばしば『孟子』を典拠とし

て持論を展開している。⁷つまり、陳亮にとっては、孟子思想と自分の思想とは矛盾しないものと考えられていたと推測されるのである。⁸

本稿では、彼の孟子理解に注意しつつ、「事功思想」と称される彼の思想を再検討する。本稿は以下の三節で構成する。一節では、若年時の著作である「六経發題」を考察する。二節では、朱陳論争の経過の中で「工夫」の概念がどのように重要性を帯びるに至るかを考察する。三節では、陳亮の最晩年の著述である「勉彊行道大有功」をめぐって、朱陳論争で陳亮にとつての課題となった「工夫」の問題がいかに扱われているかを考察する。

一 「六経發題」

陳亮はその没年の前年に状元及第を果たすまで、三度の科擧不合格を経験している。本稿は陳亮思想を考察するにあたって、まず、乾道八年（一一七二年）、陳亮が三十才の時の著作である「六経發題」に着目するが、これは陳亮が二度目の科擧失敗の後、郷里の郷学で教鞭を執っていた際のもので、六経（『周易』を欠く）と『論語』・『孟子』について書いたものである。ここでは主に「孟子發題」を取り上げ、他の「發題」については、以降の陳亮思想の発

展を論ずる上で重要と思われる部分のみ取り上げる。まず、陳亮は「孟子發題」で以下のように言う。

昔先儒に以下の言葉がある。「公なるものは、万人に共通で、私なるものは万人で異なる。人心においてその顔のようにそれぞれ異なるものは私心だ」と。ああ、私心は一度芽生えたと、止まる所を知らない。

昔先儒有言。公則一、私則萬殊。人心不同、如其面焉、此私心也。嗚呼、私心一萌、而吾不知其所終窮矣。（『陳亮集』卷一〇、「語孟發題 孟子」／上冊・一〇八頁）

この「先儒」の語は程頤の語で、「嗚呼」以下が陳亮の見解である。⁹陳亮はこの「孟子發題」で、この程頤の語を冒頭に掲げつつ、それに対する自己の解釈を説く形で、『孟子』の意義を論ずる。続いて陳亮は先王の理想の世について以下のように記す。

先王の時、礼制は行き渡って、名分は定まり、心には止まる所があった。だから天下の人は、それぞれ人の本心を識り、自分の親を親とするだけでなく、他者の親も親とし、自分の子を子とするだけでなく他者の子も子とした。その本心は同じでないことはなかった。

先王之時、禮達分定、而心有所止。故天下之人、各識其本心、親其親而親人之親、子其子而子人之子。其本心未嘗不同也。（同前）

陳亮は、先王の世では、民衆は身近な者に向ける親愛の情を、関係の浅い者にまで向けた（『禮記』禮運篇の「大同の世」を踏まえる¹¹）、とする。陳亮は、この親愛の情は、人の「本心」であり、万人が共通して有するものである、とする。以上は先王の時代についてであるが、陳亮は東周以降の混乱状況を以下のように説く。

周王朝の統治が衰え、王者としての余沢が尽き果てると、利害が興って、人心はそれに靡いて、利害を計算する心が内におこり、迷惑が外に行われ、始めは自分の身の安全を図ろうとしても、終いには奪い合い殺し合いとなって、その害悪は四海にまで流れて止まるこ
とがなくなった。

周道衰而王澤竭、利害興而人心動、計較作於中、思慮營於外、其始將計其便安、而其終至於爭奪誅殺、毒流四海而未已。（同前／上冊・一〇九頁）

周王朝が衰えて、利害が生ずる状況が興ると、「大同の世」的な状態が破壊され混乱状態に陥る。これは、冒頭の程頤の語の「私則萬殊」に対応するものと考えられる。利害を求める私心は人によって千差万別であるから、皆が利害を求める時、私心が衝突して「争奪誅殺」に至る、と考えているものと思われる。

そして、陳亮はそうした乱世に対処する教えを説いたの

が孟子であるとし、『孟子』全体の内容の重点は「人心を正す」という点にあり、「人心を正す」上で義利の区別を厳密にしなければならない、と結論する¹²。

ここまで見てきた全体の主旨から、「人心を正す」こととは、利害を計算する私心を、万人が共通して有する「本心」へと改めることを説いていると思われるが、この万人の心に共通するものを尊ぶ考え方は、『孟子』告子上の「心の同じく然る所の者は何ぞ。謂く、理なり、義なり。」を踏まえる。陳亮が、この文章の末尾で、人心を正す上で義利の弁を詳らかにしなくてはならない、とするのは、人が同じく有する「本心」を「義」、利害を求める「私心」を「利」と捉えて説いていると思われるが、ここで注目したいのは、その「本心」の内容である。

先述のように、陳亮は、先王の世では、万民は、その共通の「本心」を持っていたがために、「其の親を親とし人の親を親とし、其の子を子とし人の子を子とす」という状態だったとし、そうした状態を理想状態と説く¹³。これは『禮記』禮運篇の「大同の世」の記述に基づくものだが、禮運篇は上述の内容から墨家に近いと指摘されることもあり、儒者の中でも評価の分かれるものである。陳亮が『孟子』を解説する中で、直接関係がないと思われる禮運篇の記述に基づく語を敢えて挙げるのは、自分の思想を展開する上

での強い意図があつてのことと思われる。つまり、陳亮にとって、万人の「本心」が同じであることは、単に誰もが同様である、と意味するのではない。身近な者に向ける親愛の情を、関係の浅い者にまで向ける、という禮運篇の「大同の世」的な人間觀を理想とする観点から、同じ「本心」を持つ者たちは、本来それを根拠として一体的である、と考えていると思われる。自分の利益を求める心も、万人が有するものとも思われるが、陳亮はそれを「私心」として「本心」と区別するのは、そうした「大同の世」的な、万人が分け隔てなく一体的な状態を本来的なあり方とする立場からであると考えられる。以上のように、「孟子發題」のテーマは、万人が同じく有する「本心」についてであるが、それと関連して注目したいのが、「論語發題」での學問觀である。

『論語』の一書は、「下學」の事でないものはない。學者はその「上達」の説を求めるが、それが得られないと、その深淵そうな言葉を取って、懸命に意味を考え、考えが熟すと、またこのために言葉を作って、「これが精髓だ、あの經文はただその略微なものだ」などと言う。ああ、これが彼らが死ぬまで經書を読んで、身をやつしても、それでも得るところがあつた、と言う所以である。かの道は天下において、本末も内外も

無い。聖人の言に、どうして一方だけを挙げて、もう一方を言わないことがあるうか。：そうであれば『論語』の書はどのように読めばよいのか。思うに、聰明さを心の内に用いて、ひたすら「下學」に専心して、「その心の同じく然るところ」を求めるのだ。努力が積み重なれば、他日の「上達」は、今日の「下學」のことでないものはないのだ。

論語一書、無非下學之事也。學者求其上達之說而不得、則取其言之若微妙者、玩而索之、意見見長、又從而為之辭、曰此精也、彼特其粗耳。嗚呼、此其所以終身讀之、而墮於榛莽之中、而猶自謂其有得也。夫道之在天、下、無本末、無内外。聖人之言、烏有舉其一而遺其一者乎。……然則論語之書、若之何而讀之。曰、用明於内、汲汲於下學、而求其心之所同然者。功深力到、則他日之上達、無非今日之下學也。（同前、「論語發題」／上冊・一〇八頁）

陳亮は「學者」にありがちなこととして、『論語』に「上達の説」を求め、これを解釈して精妙なものに仕立てようする、とし、そうした態度に反対する。これは「上達」を「天理に上達する」¹⁴ことと解し、日常世界のことを説くことが多い『論語』を形而上的に解釈する傾向のある道学的な立場を念頭に置くものと考えられる。そして陳亮は、ひ

たすら「下學」して、「心の同じくする所」を求め、それを蓄積することで、今日「下學」したことが、他日に「上達」するのだ、とする。ここでも陳亮は、「孟子發題」と同じく「心の同じくする所」を重視する。そして、形而下から形而上へ、という道学的な学問の発展の方向性を否定し、「上達」を、飽くまで形而下的な実践としての「下學」の蓄積と捉える。「道」に「本末」「内外」は無い、という語自体は、道学の常套句であるが、以上の文脈から、陳亮は眼前の形而下の世界に「道」を見出すべきと説いていると考えられる。

更に、「周禮發題」では聖王の政治について、「良好な風氣に従い、時宜に依拠して法を制定した（『順風氣之宜、而因時制法』上冊・一〇四頁）¹⁵」¹⁶とい、「書經發題」では、「民の心に従って、時宜に依拠したので、通常の状態にあっても怠らず、異変に遇っても天下は安定していた（『順民之心、因時之宜、處其常而不惰、遇其變而天下安之』上冊・一〇三頁）」¹⁷¹⁸とい、民の心に順って、時宜に則った政治を行ったと説く。これらは庄司莊一氏が指摘するように¹⁹、聖王の政治は、古今不変のものではなく、「限定した一時代に即して制度を布いた」ものだったという、「變通の理」を説くものである。

以上論じた「六經發題」の内容をまとめよう。陳亮は万

人が共に有する「本心」に治乱の転機・学問の重点を見出し、「義利の辨」や「下學上達」という道学の重要タームもこの語との関連の中で理解する。つまり、万人が有する本心と利害を求める私心とを弁別することが「義利の辨」で、日常の人倫においてこれを求めることが「下學」、その努力を積み重ねることが「上達」で、万人が共有する心に依拠して、時宜に則した政治を行うことが聖王の理想の政治と考えられている。道学的な「形而下」から「形而上」へ、という学問の段階的発展を意識しつつそれを否定し、形而下の日常卑近なものの中に理想を見出そうとする姿勢を指摘することができるものと思われる。以上は陳亮思想の基本的輪郭を示すものである。

二 朱陳論争時の陳亮思想

朱陳論争の往復書簡の内容については、既に多くの先行研究があるが、本稿では陳亮思想の展開を考える上で特に重要と思われる「本領」と「工夫」という概念に関わる部分に注目して両者の議論の展開を追う。

陳亮と朱子の書簡のやりとりは、淳熙九年（一一八二年）に始まるが、朱陳論争は淳熙十一年（一一八四年）、陳亮が四十二才の時に開始され、三年間継続する。この論争の

開始時期の陳亮の書簡である「又甲辰秋書」において、陳亮は以下のように自己の立場を述べる。

孟子や荀子は王霸と義利の弁別を説いたが、漢唐の諸儒はその意味を深く理解することができなかった、しかし伊洛の諸儒が天理と人欲とを弁別したことで、王霸義利の説は大いに明らかになった、と陳亮は言う⁽¹⁸⁾。

このように陳亮は、『孟子』や『荀子』が説く王霸や義利の区別を認め、またそれを天理・人欲の区別によって説明する程子の立場にも同調する。陳亮が否定するのは、同じく程子の、三代は道によって天下を治め、漢唐は智力で天下を掌握した、とする説であり、その説を発展させた朱子の、三代は天理を行い、漢唐は人欲を行ったとする説なのである。陳亮は、三代と漢唐の統治を区別して論ずる朱子らの主張に反対し、両者を天理の世として同様のものとして説こうとしたものと言える。

更に、同じ書簡で陳亮は、漢唐が人欲の世であるなら、三代以降の一五〇〇年もの間、天地と人々はほろを補いながら月日を過ごしたことになる、それでどうして万物が繁栄し、『道が常存』⁽¹⁹⁾することを説明するのか、と言う。そして陳亮は漢唐の君主とその他の群雄との違いを強調して以下のように言う。

だから、私が思うに、漢唐の君主は根本（本領⁽²⁰⁾）が

広々として大きくないものはない。そうであるから、人や物はこれに依拠して生息したのだ。ただ、時の変遷があつて、その間に遺漏がないわけにはいかなかったのだ。曹操は根本がいつもねじ曲がついて、天地をつかもうとしても定まらず、勝ったり負けたりで、それ以上手の施しようもなかった。これこそ、専ら人欲を行つても、その間にうまくいくものもあつて、わずかばかりの天理がその間に行われることもある、というものだ。⁽²¹⁾ 諸儒の論は曹操以下の者たちに向けるのはよいが、これで漢唐を断ずるのは、どうして冤罪でないだろう。

故亮以為、漢唐之君、本領非不洪大開廓、故能以其國與天地並立、而人物賴以生息。惟其時有轉移、故其間不無滲漏。曹孟德本領一有蹺欹、便把捉天地不定、成敗相尋、更無著手處。此卻是專以人慾行、而其間或能有成者、有分毫天理行乎其間也。諸儒之論、為曹孟德以下諸人設可也、以斷漢唐、豈不冤哉。（『陳亮集』卷二八、「又甲辰秋書」／下冊・三四〇頁）

陳亮は、「本領」が広々として大きいこと（『洪大開廓』）に為政者が持つべき資質を見出し、それを持つ漢唐の君主を称揚し、それを持たない曹操のような覇者と区別する。また、陳亮はここで漢唐の政治には「滲漏」があり、完全

無欠ではないことにも触れている。本稿一節では、陳亮は、聖王は民心に依拠して、「時宜」に則した政治を行ったと説いていることを論じた。これを踏まえれば、ここで漢唐の不完全であることを、「時の移り変わりのため」と説明するのは、漢唐がそうした時宜の変化への対処が充分でなかったと言うものと思われる。

さて、ここに陳亮思想の重要概念として「本領」の語を確認できるが、この語の意味を今少し考察すれば、同じ書簡で「開廓」の語を用いて以下のように言う。

人が天地と並び立つて三となる所以は、智仁勇の三達徳が一身の隅々にまで備わっているからだ。『孟子』は終日「仁義」を説くが、『孟子』「公孫丑上」で公孫丑と話す一段では「勇」のことを詳細に説いて、更にそれが発展して「浩然の氣」となるとしている。思うに、「広々としている（開廓）」ことを担っていくのでなければ、どうして仁義を有していると言えるのか。

夫人之所以與天地並立而為三者、仁智勇之達徳具於一身而無遺也。孟子終日言仁義、而與公孫丑論一段勇如此之詳、又自發為浩然之氣。蓋擔當開廓不去、則亦何有於仁義哉。（同前）

智・仁は道德的な素質、勇はこれらを具体的に運用する能

力と考えられているようであり、本領が「開廓」であることは、この「勇」に対応するものと思われる。陳亮にとつての「本領」とは道德性を實際に發揮していく上での「氣力」と理解されているように思われる。⁽²³⁾

以上のような「又甲辰秋書」での陳亮の主張に対して、朱子は、漢唐の創業の主の「心」について、その心は天理に純然としたものでなく、仁義の名を借りて私欲を行ったもので、ただ同時代に争った他の群雄よりも才能知術の面上で上回ったために大きな功業を成したに過ぎない、とする。⁽²⁴⁾そして、堯舜から孔子に至る歴代の聖王が伝授した「道」は一日も天地に行われていない、とする。

また、漢唐が人欲の世なら、どうやって「道の常存」を言えるのか、という陳亮の間には、道の存続はそもそも人が関わるものではなく、古今を通じて道は不滅のものであるから、三代以降の一五〇〇年もの間、人に壊され続けても、結局滅びることはない、というだけで、漢唐の君主は何ら道に寄与していない、と朱子は言う。⁽²⁵⁾

陳亮は、続く書簡の「又乙巳春書一」において、三皇五帝は無為の治を行ったが、堯舜以降は法制を作ったり、世襲王朝の仕組みを作ったり、反乱者を鎮圧したり無道の王朝に対して革命を行うなど、聖王の世は各人が置かれた時勢に応じて適切に政治の仕組みを変化させたものだった、

とする。⁽²⁶⁾これは「道の常存」には人為は関与しない、とした朱子の主張に対応するものと考えられるから、陳亮は、聖王の世にあっても、道は人為の積極的な働きかけによって実現されることを言おうとしたものと思われる。また、陳亮は、「心に常泯無く、法に常廢無し」といい、心が常に泯滅し、法が常に廃止されていることなどあり得ないとし、三代以降の時代でも、統治者の心が尽く人欲だったとは言えない、とする。

これに対して、朱子は右のような時局に対処する政治変革に「道」を見出す陳亮の考え方は、三代を貶め、漢唐を崇めて両者を同格に見るもので、古と今では正しいものがない、聖賢の事であっても尽くは手本とはできない、と考えるものだ、と反発する。⁽²⁷⁾そして、朱子は、陳亮の「心に常泯無し」の語自体は誤りでないが、心は「常に泯滅しない」ことを目指すべきで、「常に泯滅することはない」ことを待みとすべきでない、とする。そして、陳亮の主張は、人心が危ういの任せ、時として泯滅することを当然のこととし、道心がそのままでは微かであるのを放置して、わずかばかりに泯滅しないことがあるのを願うばかりものだ、と痛烈に批判する。⁽²⁸⁾

そもそも陳亮が「心に常泯無く、法に常廢無し」の語を発したのは、朱子が漢唐の統治は些かも道に寄与しなかつ

た、と説くのに対して、漢唐の統治に積極的側面を見出すとしてのものである。これに対して朱子は陳亮のこの発言の背後にある、漢唐の統治者の心が完全無欠でないことをわかつていながら、そこに強いて道理を見出して肯定しようとする姿勢を批判しているといえる。朱子は右のように陳亮の言葉をうまく利用することによって、陳亮自身が認識している「常に泯滅しない」という理想状態に目を向けさせようとするのである。そして、朱子は、道も人も古今に違いは無いのであり、心を「常に泯滅しない」ようにする工夫として人欲を消し去る「聖王傳授の心法」を説きつつ、漢唐の世ではなく、聖王の世こそを目指すべきと説く。

陳亮の「又乙巳春書一」の聖王の政治の人為性を強調する主張は、道の常存は人と関係がない、と言う朱子の批判に應ずるものであるが、ここに至って、朱子の考える聖王の統治は、「工夫」という人為の産物であるという考えが示されたことは、その「工夫」の内容はおいておくにしても、「道」を積極的な人為の結果によるものとする陳亮にとって受け入れ易かったと思われる。

以上の朱子の批判を承ける形で、陳亮の論調にも変化が生じ、続く陳亮の書簡（「又乙巳春書之二」）には、「三代は行い尽くしたものであり、漢唐は行い尽くさなかつたも

のである」⁽²⁹⁾との語が出て、漢唐が三代に及ばないことが明言され、更に、次の「又乙巳秋書」では、以下のように言う。

私の主張の要点は、根本が広々としていて、工夫が行き渡っていると、三代を成し遂げるのであり、根本はあっても工夫がないと、ただ漢唐を成し遂げるだけだ、ということだ。

亮大意、以為本領闊闊、工夫至到、便做得三代。有本領無工夫、只做得漢唐。(同前、卷二八、「又乙巳秋書」

／下冊・三五一頁)

このように陳亮は朱子との論争を通じて、三代と漢唐との分かれ目は「工夫」にある、と明確に意識するに至るのである。「又甲辰秋書」でも、漢唐の政治には「滲漏」があり、完全無欠ではないことに触れられていた。しかしそこでは、根本では三代に等しいことが強調され、漢唐を肯定する文脈で説かれ、完全なる聖王の世を目指すべき論調は見出せない。これに対して、乙巳年間の陳亮の書簡では、「工夫」の有無こそが聖王と漢唐とを分ける原因で、「工夫」によって三代の世を実現できるとする朱子の主張に同調する形で、「乙巳春書一」では漢唐は三代に及ばないこと、また「乙巳秋書」では、工夫が完全であれば三代を成し遂げられることが明言され、漢唐に満足せず、三代を目指すべき方向

性が示されたのである。

これまで、朱陳論争は、両者の議論は最後まで平行線をたどった、と整理されてきた。両者が和解することなく自説を貫いた、という結果だけ見れば、その通りであろう。しかし、両者の議論の展開を見る時、それとは異なる意義を見出すこともできる。つまり、陳亮は朱子の批判を受けて自説を修正した、あるいは少なくとも論争初期の陳亮の主張には見られなかった観点が、論争を通じて現れるようになった、ということである。

もっとも、この論争時では、陳亮にとつての「工夫」の中身は結局明確に説かれていない。この点に関して陳亮はその後も思索を深めたと考えられ、そこで注目される文章が、「勉強行道大有功」(『陳亮集』卷九)である。

三 「勉強行道大有功」

陳亮は紹熙四年(一一九三年)に状元での及第を果たすが、この「勉強行道大有功」はその歳に書かれたもので、翌年に死去する彼にあつては、最晩年の著述である。

題名の「勉強して道を行えば、大いに功有り」とは、『漢書』董仲舒傳が記載する、賢良対策の際に董仲舒が武帝に對して發した言葉を踏まえる⁽³⁰⁾。陳亮は、この發言の真意を

解説することを通じて、自己の思想を表明する。

天下にどうして道と関係のない物事などあるうか。しかし、人心は危うく、一瞬たりとも把持しないわけにいかない。その心を把持しないで（『孟子』に言う）「聲色貨利」の状況にふらふらとし、それでいてあまねく毎日のあらゆる機会に应じて、事がうまくいかないことを責めるのも、根本を失うものであろう。これは儒者が大いに恐れるものだ。

天下豈有道外之事哉、而人心之危、不可一息而不操也。不操其心、而從容乎聲色貨利之境、以泛應乎一日萬幾之繁、而責事之不效、亦可謂失其本矣。此儒者之所甚懼也。（『陳亮集』卷九「勉彊行道大有功」／上冊・一〇〇頁）

「天下に豈に道外の事有らん」の語は、「道に本末内外無し」と言った「論語發題」の主張と同様、眼前の形而下的事物の中に「道」を見出していこうとする主張と考えられる。そして、「勉彊して道を行へば、大いに功有り」の語に対して、以下のように解説する。

そもそも「道」というのは他でもない。喜怒哀楽愛惡の感情が正しい状態を得ることだ。（董仲舒の語の）「道を行う」とは他でもない。喜怒哀楽愛惡の端緒を審らかにすることだ。一瞬たりとも心力を尽くさないこと

がないようにすることが、勉強の本質なのだ。（『孟子』公孫丑上の）「賢者は位に在り、能者は職に在り」の状態で、一人も安楽でない民は無く、一つも養われない物が無い、という状態に至るのが、「大いに功有り」ということの効驗なのだ。

夫道豈有他物哉、喜怒哀楽愛惡得其正而已。行道豈有他事哉、審喜怒哀楽愛惡之端而已。不敢以一息而不用吾力、不盡吾心、則彊勉之實也。賢者在位、能者在職、而無一民之不安、無一物之不養、則大有功之驗也。（同前／上冊・一〇一頁）

このように陳亮は「道」を「喜怒哀楽愛惡」の感情（『禮記』禮運篇に基づく）が正しい状態を得ることとし、それに沿う形で、「勉彊して道を行えば、大いに功有り」の語を理解する。では「喜怒哀楽愛惡」の感情を「道」とすることとは具体的にはいかなる実践なのか。陳亮は漢の武帝は優れた才能と高い志を持った君主で、儒教經典を表彰したことなどは三代の聖王に比肩する⁹¹とした上で以下のように説く。

堯舜が（『尚書』で）「ああ（都）」とか「しかり（俞）」と言うのは、堯舜の喜びから発せられたものだ。彼らが一度喜ぶと天下の賢者は尽く任用された。（『尚書』中の）湯王の湯誓や武王の太誥は、彼らの怒りから発

せられたものだ。(『孟子』梁惠王下にあるように) 彼らが一度怒ると、天下の暴乱は全て除かれた。このように「道を行」って功績を挙げたのだ。

堯舜之都兪、堯舜之喜也。一喜而天下之賢智悉用也。湯武之誥誓、湯武之怒也。一怒而天下之暴亂悉除矣。此其所以為行道之功也。(同前)

このように陳亮は、『尚書』や『孟子』に基いて、聖王は「喜怒」の感情を契機として天下の民に安定をもたらしたとし、これが、董仲舒の言う「道を行って功績を挙げる」こと、陳亮の理解からすれば、「喜怒哀樂愛惡」を正しく発動すること、とする。以上は、聖王が「喜怒哀樂愛惡」の「道」を正しく行って、「大きな功業」を挙げた、という話であるが、武帝の功業に対しては、以下のように説く。

經典を尽く官に上送したのは、武帝一人の喜びというわけではない。武帝がこれを一人の喜びとしたなら、真偽が混沌としてただの虚文となつただろう。夷狄が漢王朝を侵略してきたのは、武帝一人の怒りではない。武帝がこれを自分一人の怒りとしたならば、人々は安心して生活できず、ただの世の戒めとなつただけだろう。もし、武帝が「勉強して道を行う」ということを知り、それで正しくこれを用いていけば、本物の經典が表に現れて、聖人の道は明らかとなり、必ず虚文と

なることはなかっただろう。夷狄を打ち払って中華と夷狄の区別は安定し、必ず世の戒めとならず、その功績は計りようもないほどだったであろう。

經典之悉上送官、非武帝之私喜也。用爲私喜、則眞僞混淆、徒爲虚文耳。夷狄之侵侮漢家、非武帝之私怒也。用爲私怒、則人不聊生、徒爲世戒耳。使武帝知彊勉行道、以正用之、則表章而聖人之道明、必非爲虚文也。誅討而夷夏之勢定、必不爲世戒也、其功豈可勝計哉。(同前／上冊・一〇一—一〇二頁)

武帝の六経の表彰という文化事業と、その匈奴への外征事業とが、自分一人の「私」の感情より発したのではない、として武帝の感情を一応容認する。そして、もし董仲舒が言うように、「勉強して道を行う」ということを知っていたならば、完全無欠の功業を成就していただろう、とする。それでは実際の武帝はどうだったのか。

武帝は優れた素質と大きな計画を持っていたが、「聲色貨利」の状況にふらふらとして、そのまま毎日の様々な機会に遍く応じたが、これを警戒恐懼することを知らず、どうしていつも弊害とならないだろう。

武帝奮其雄材大略、而從容於聲色貨利之境、以泛應乎一日萬幾之繁、而不知警懼焉、何往而非患也。(同前／上冊・一〇二頁)

このように、陳亮は、武帝が「聲色貨利」の状況に対して、警戒して正しく対処していなかったと責めており、そこに聖王のような理想の世を実現できなかった原因を求めるのである。これは、朱陳論争の際の、漢唐は「本領はあつても工夫が足りない」とした評価を引き継ぐものであるが、この文章では明確にその工夫の内容と、漢唐の君主を理想とせず、聖王の世を目指すべきとする方向性が示されているといえる。

このように、陳亮はこの文章の題名の「勉強して道を行えば大いに功有り」の語を、董仲舒が武帝を戒めて心の修養を勧めた語と解釈する。陳亮はこの語を解説する上で、この語を利欲にまみれた武帝の心を「淵源正大の理」に正すよう諫めたものとする「説者」の説を挙げる。この「説者」の説は、董仲舒を功利否定の思想家と捉える朱子の⁽³³⁾ような立場を想定したものと思われるが、陳亮はこの「説者」の説を批判して以下のように言う。

かの「淵源正大の理」なるものは、事物に達していないなら、孔孟の学問は真に迂闊なものであらう。時の君主が用いなかったのも無理はない、ということになつてしまふ。

夫淵源正大之理、不於事物而達之、則孔孟之學、真迂闊矣。非時君不用之罪也。（同前）

このように陳亮は「説者」の解釈を否定し、この語を以下のように、董仲舒が武帝の大事業好き（陳亮が言うところの「事物」）を道を行う端緒とすべきことを説いたものと解釈する。

〔孟子〕梁惠王下で言うところの（齊の宣王の）「好色」「好貨」「好勇」は、どれも道を害することに他ならない。孟子はかえつてこれを「擴充」（孟子）公孫丑上）することを説いた。「好色」はすべての人が同様に持っているものであるが、これを独身の男女が一人もいない、という状態にまで到達させれば、「勉強して道を行つて」、それによつてその同じくする心を達成させる、ということであり、好色は必ず溺れるには至らず、道の手ではなくなるのである。……また、孟子は、生贄の牛を哀れんだ心を「擴充」して、年老いた者でも不自由のない状態にして（孟子）梁惠王上）これを王道といった。孟子が王道を言つたのは、どうして事情に切実でないであらう。

齊宣王之好色・好貨・好勇、皆害道之事也。孟子乃欲進而擴充之。好色、人心之所同、達之於民無怨曠、則彊勉行道以達其同心、而好色必不至於溺、而非道之害也。……不忍一牛之心、孟子欲其擴充之以至於五十之食肉、六十之衣帛、八口之無饑、而謂之王道。孟子之

言王道、豈為不切於事情。(同前)

陳亮は『孟子』の記述に基づいて、好色・好貨などの欲求は、一身においては害であつても、「擴充」することでの害ではなくなる、とする。ここで『孟子』の原文の内容と陳亮の主張の關係について、整理して論じておきたい。「好色」「好貨」「好勇」の語は、いづれも『孟子』³⁴ 梁惠王下の、孟子と齊の宣王との問答で説かれるものである。「好色」「好貨」(梁惠王下の原文ではこれに加えて「好樂」も挙げられている³⁵) に関する孟子と齊の宣王との問答は、以下のようにまとめられる。

齊の宣王は孟子に自分の欠点として「好樂」「好色」「好貨」「好勇」を挙げ、自分には王道を行う資質がないと言う。孟子は宣王に対してこれらの欲求を抑えようとせず、かえって詩書や聖王の故事を引いて、古の聖王もこれらの欲求を持っていた、と説く。そして、これらの欲求は、聖王と百姓とが同様に持っているもので、聖王はこれらの欲求を自分だけでなく、百姓にも叶えて「王道」を実現した、とする。このように孟子は、「好聲」「好色」「好貨」「好勇」の欲求を、「王道」を行う契機とする。

陳亮は『孟子』におけるこれらの感情の扱われ方に着目して、武帝の大事業を好む心もこれと同様に、「説者」が説くようにこれを消し去るべきものとするのではなく、むしろ

ろ万人の心と等しくするものとしてこれを拡大・發展させるべき方向で捉えようとし、またそうすることを促すものとして董仲舒の語を理解するのである。このように、『孟子』は好貨・好色などの欲求を王道の契機として説明するわけであるが、『孟子』 梁惠王上では「利」を厳しく否定する。このことについては陳亮は以下のように言う。

思うに、利害を計算することは、「本心」が持つていてよいものではない。その極まるや、親を忘れ君主を軽んずるに至るのであり、事物の理に達することができないのは、好貨好色の比ではない。ましてや牛を哀れんだ心とは比較にならないのだ。

蓋計較利害、非本心之所宜有、其極可以至於忘親後君、而無可達於事物之理、非好貨好色之比、而況不忍一牛之心乎。(同前)

利害を計算する心は「本心」ではない、と考えるのは、一節の「孟子發題」の「本心」説を引き継ぐものである。「利」を求めるのは「好貨」「好色」と違い、そもそも自分を優先するものであるから、否定されるのである。そして、陳亮はこの文章の最後に以下のように記す。

聖賢が言う「道」は、後世の者が言う「道」とは異なるのである。人主たるものは、「聲色貨利」が溺れやすいものであることを知って、毎日のあらゆる機会を

畏れ慎み、自分が当に行うべきことに努めれば、董仲舒の意図に近いであろう。ああ、どうして天下に道と関係の無い事物などあらうか。

聖賢之所謂道、非後世之所謂道也。為人上者、知聲色貨利之易溺、而一日萬幾之可畏、彊勉於其所當行、則庶幾仲舒之意矣。夫天下豈有道外之事哉。（同前）

このように陳亮は人主が行うべき工夫として「彊勉行道」を説き、この文章の冒頭で掲げた、道と関係の無い事物はない、という語で締めくくるが、これは喜怒哀楽の感情や好貨好色のような欲求の中にこそ「道」があることを強調したものといえる。

一節・二節の内容を踏まえる形で、この文章の意義を述べたい。一節では、陳亮は、万人が共有する本心を根拠として、身近な者に向ける愛情を、関係の浅い者にも向けて、万人が一体的となる状態を理想としていることを論じた。三節で論じた、自分の喜怒哀楽愛惡の感情や、好色好貨の欲望を契機として、万民と感情を等しくし、万民の欲望を充足させるよう努めることで、聖王の世を実現する、という考え方は、こうした一節の本心論を引き継ぎつつ、『孟子』の工夫論を取り込んで、より具体的な修養法を説く点に特徴があると言える。また、二節では、陳亮は朱子との論争を通じて、漢唐に満足すべきでなく、聖王を目指すべきこ

と、その上で「工夫」が重要であることを自覚したことを論じた。陳亮は、二節で直面した課題に取り組み、この文章で、朱子とは異なる欲望肯定的な工夫論を打ち立てようとしたものと言える。

結語

陳亮の思想は、結果としての功利の大きさを第一の価値基準とする「事功主義」としばしば理解される。しかしそのような陳亮の考え方が、動機の正しさを問題としていないと見るなら、それは適当ではない。陳亮は、為政者の心が万民と共同であることが、大きな功業をもたらすと考えており、その意味で事功派と呼ばれる陳亮も同じく動機を重んずる立場にあると言えるのである。

ただし、朱子の動機主義は功利性・打算を排除するものである。これに対して、陳亮の動機主義は、万民と心を等しくするという意味での動機の公共性を求めるもので、そのようなあり方を「義」、自分一人の利益を求めることを「利」とするものである。陳亮は公共のために「賞罰」によって万民を操縦することを肯定しており、公共の利益を求めるための打算をむしろ奨励する。以上は朱子と陳亮の「義利の辨」に対する捉え方の違いだが、更に両者には「義」

に対する認識が根本的に異なることも指摘できる。

三節で論じたところによれば、陳亮は、『孟子』を踏まえて「好貨」「好色」などの欲求は、一身においては悪だが、万人においてそれを達成しようと「擴充」すれば、王道のきっかけとなり、善となる、と説いている。つまり、道德的な善惡の違いを万人との共同性の有無という点に求めている。朱子にとっては「義」とは絶対的な規範としての本性であるから、一身において悪であることは、共同性を持つたところで、善となることなどあり得ない。

この善惡を共同性の有無において捉える、という点は、陳亮思想の性格を考える上で重要な意味を持つているように思われる。陳亮は朱子と同様、私欲を否定するが、朱子のように私欲を滅却することによってではなく、万人と共同的なものとするのが正しい対処するのである。三節の「道外の事無し」という主張は、形而下に即して道を求めることを説くもので、その語自体は一見道学と相容れないものではない。しかし、陳亮の主張しようとするところは、人の感情・欲求などの「事」は共同的事となることで「道」を行うきっかけとなるのであり、抑圧・否定すべき「事」などない、と言うものと考えられ、「人欲を滅ぼす」ことを修養の基本方針とする朱子とは全く異なるものである。

以上のように、万人と共同的であることを求める陳亮の

動機主義は、受益者の拡大が目指される点で、より多くの功業を求める、ということと重なる。このような特徴は、結果を重んずるものとしての事功主義と受け取られる一面を形成していると考えられる。以上は、陳亮の思想を「事功主義」とする、一般的な陳亮理解がどこまで妥当か、陳亮の立場に立つて再検討したものである。

また、本稿では、陳亮の若年、壮年、晩年の三つの時期の著作を順に考察したが、以上の考察から、陳亮思想において、終始一貫する点と、朱子との論争を経て新たな展開を迎えた点の二点を指摘できるものと思われる。

一節での「道に本末内外無し」の語、二節での「道の常存」、「心に常浪無し、法に常廢無し」という主張、三節の「天下に道外の事無し」の主張は、いずれも眼前の形而下的事物の中に「道」を見出すことを言い、また、理想を日常・卑近なものへの否定・抑圧としてではなく、その拡大・発展を通じて得られることを主張する文脈の中で説かれていく。これは陳亮思想の終始一貫するテーマと言える。

そして、陳亮は、朱子との論争を通じて、漢唐と三代の差は「工夫」の徹底度によって、工夫を徹底させることによって三代の功業を達成できる、という観点を得た。朱子の説く工夫は人欲を滅ぼすことであるが、論争時には陳亮は「工夫」の必要性を認めつつ、「工夫」の具体的内容に

は言及していなかった。三節で考察したように、陳亮はこの「工夫」の内容を『孟子』に求めたのである。

『孟子』の「好貨」「好聲」「好色」の条は、先述の、陳亮の一貫した思想の特徴である、理想を日常卑近なものの拡大発展として捉える傾向に合致しており、陳亮思想を深化させるものとして、『孟子』の思想が役立ったものと思われる。これは朱子との論争を経て新たな展開を迎えた部分である。

『語類』には、朱子が『孟子』のこれらの条に対して、「孟子は説き方が粗い」、「孔子と比べて説き方に弊害がある。聖人と賢人との違いがわかる」と弟子に漏らしていることが記録され、またこの条の集注ではわざわざ「曲学阿世の言ではない」と断っている。このことは、朱子にとって『孟子』のこれらの条はそのまま読めばそう感じかねない内容だったこと示しているように思われる。⁽³⁸⁾このように朱子はこれらの条に対して疑問をもちつつ接したのに対し、陳亮は大いに自己の思想の根拠として取り入れる。このことは、道学の多様な思想的展開が、『孟子』という書物が持っている多面性に関係があることを示しているように思われる。

注

(1) 陳亮の生涯は、吉原文昭「陳亮の人と生活」(『南宋学研究』、研文社、二〇〇二年、所収)、鄧広銘「陳龍川伝」(新華書店、二〇〇七年)に詳しい。また、本稿の引用する陳亮の著作の原文・頁数は『陳亮集・増訂本(上下)』(鄧広銘点校、中華書局、一九八七年。以下、『陳亮集』)による。なお、陳亮の文集『龍川文集』は、葉適の序によると、もとは四十巻本だったが、現存の成化版は三十巻である。現行本は、ホイット・クリーブランド・ティルマン(Hoyt Cleveland Tillman。中国名、田浩)氏がアメリカ現存の宋刊本『圈點龍川水心二先生文粹』に三十巻本『龍川文集』にない逸文を発見し、鄧広銘氏が増訂して出版したものである。陳亮の文集の版本は『陳亮集』所収、鄧広銘「陳龍川文集版本考」に詳しい。陳亮の著述の成立年次は、顔虚心「陳龍川先生年譜長編」(『宋人年譜叢刊』、四川大學出版社、二〇〇三年一月、所収。)を参照。

(2) 『晦庵先生朱文公文集』(以下、『朱文公文集』)卷三六「與陳同甫」(『朱子全書・修訂本』所収、上海古籍出版社・安徽教育出版社、二〇一〇年、一五八一頁、以下、『朱文公文集』)の引用文・頁数はこれによる。「願以愚言思之、細去義利雙行、王霸並用之說、而從事於懲忿窒慾、遷善改過之事。」なお、「義利雙行、王霸並用」の語が陳亮思想を概括するのに相応しくないことについては、鄧広銘「朱陳論辯中陳亮王霸義利觀的確解」(『北京大學報』、一九九〇年第二期)に詳しい。

(3) 庄司莊一「陳亮の学」(『東洋の文化と社会』四、一九五五年)、庄司莊一「朱子と事功派」(『朱子学入門』明徳出版社、一九七四年、所収)などに散見。

(4) 『陳亮集』卷二八「又甲辰秋書」／下冊・三四〇頁「諸儒自處者曰義曰王、漢唐做得成者曰利曰霸、一頭自如此說、一頭自如彼做、说得雖甚好、做得亦不惡、如此卻是義利雙行、王霸並用。如亮之說、卻是直上直下、只有一箇頭顱做得成耳。」このように陳亮は、朱子が陳亮に対して発した「義利雙行、王霸並用」の評価をそのまま朱子に送り返して応酬している。

(5) Hoyt Cleveland Tillman "Utilitarian Confucianism: Chen Liang's Challenge to Chu Hsi" (Harvard Univ Asia Center, 1982) は、陳亮を「utilitarian」、功利主義者と位置付けている。また狩野直喜『中國哲學史』(岩波書店、一九五三年)は、陳亮が孟子を尊崇したことに触れつつ、陳亮は結果を重んずる立場で、それ故に動機を重んずる朱子と対立した、と指摘する(四二二頁)。

(6) 田浩『功利主義儒家 陳亮対朱熹の挑戦』(江蘇人民出版社、一九九七年七月)は、陳亮の思想を『文中子』の系譜を引くとする「功利主義的事功倫理学」(九五頁)とし、孟子や董仲舒の系譜を引くとする朱子の「動機倫理学」(一一〇頁)と対比して理解する。

(7) 陳亮と同時代でも、陳亮と思想的立場の近い永嘉学の葉適(字は正則、号は水心。一一五〇～一二二三)は、孟子を痛烈に批判しており、建前として孟子尊崇の態度を取ら

ざるを得なかった、ということはないものと思われる。

(8) 先述の田浩氏も、陳亮が「六經發題」で、明確に孟子の義利の弁を肯定することに言及する。しかし、氏は、これを朱陳論争時の陳亮思想と区別し、陳亮が未だ「功利思想」を説いていない時期の思想を示すものと位置づける。『功利主義儒家 陳亮対朱熹の挑戦』五九頁。

(9) 『二程集』(中華書局、二〇〇四年、一四四頁)「河南程氏遺書」卷十五「入關語録」、「公則一、私則萬殊。至當歸一、精義無二。人心不同如面、只是私心。」なお陳亮の文章では「至當歸一、精義無二」の部分がないが、これは「近思録」卷一の引用に同じ。

(10) 引用の程頤の語に似た例として以下を参照。『二程集』河南二程粹言」卷二、心性篇／下冊・一二五六頁「子曰、公則同、私則異、同者天心也。」これと「程氏遺書」の内容を合わせれば、「公」とは万人において共通であるものの、「私」とは万人において異なるもの、と言っているものと考えられる。

(11) 『禮記』禮運「大道之行也、天下為公……故人不獨親其親、不獨子其子……今大道既隱、天下為家、各親其親、各子其子」「孟子發題」の「親其親而親人之親、子其子而子人之子」の記述は、「故人不獨親其親、不獨子其子」の語を言い換えたものと思われる。

(12) 『陳亮集』卷十／上冊・一〇九頁「孟子生於是時、憫天下之至此極、謂其流不可勝救、惟人心一正、則各循其本、而天下定矣。……故善觀孟子之書者、當知其主於正人心、

而求正人心之說者、當知其嚴義利之辨於毫釐之際。」

- (13) 陳亮が最も親しくした呂祖謙は、陳亮を「亮口誦墨翟之言」と評したとされ（『陳亮集』卷二八、「又甲辰秋書」／下冊・三三九頁）、楊時に墨家の説に近いと疑われた張載『西銘』の解説（同前卷二三、「西銘説」／下冊・二六〇頁）を遺している。

- (14) 『論語集注』（四書章句集注）、中華書局、一九八三年、一五九頁）憲問篇、下學上達章、朱注所引程子説「又曰、學者須守下學上達之語、乃學之要。蓋凡下學人事、便是上達天理。」

- (15) 庄司莊一「陳亮の変通の理について」（入矢教授小川教授退休記念会、『入矢教授小川教授退休記念中国文学語学論集』、一九七四年）

- (16) 前掲庄司莊一「朱子と事功学」、前掲鄧広銘「朱陳論辯中陳亮王霸義利觀的確解」、東景南「朱子大伝」（福建教育出版社、一九九二年）、中嶋諒「陸九淵と陳亮——朱熹論敵の思想研究——」（早稲田大学出版部、二〇一四年）を参照。朱子の書簡と陳亮の書簡の対応関係は、前掲『陳亮集・増訂本』が付録する朱子の書簡に附記され、本稿もその考証に異論ない。

- (17) 『二程集』「河南程氏粹言」卷一、君臣篇／下冊・一二四三頁「子曰、王者奉若天道、動無非天者。故稱天王。命則天命也。討則天討也。盡天道者、王道也。後世以智力持天下者、霸道也。」

- (18) 『陳亮集』卷二八、「又甲辰秋書」／下冊・三四〇頁「自

孟荀論義利王霸、漢唐諸儒、未能深明其說。本朝伊洛諸公、辨析天理人欲、而王霸義利之說、於是大明。然謂三代以道治天下、漢唐以智力把持天下、其說固已不能使人心服。」

- (19) 『陳亮集』卷二八、致朱熹「又甲辰秋書」／下・三四〇頁「信斯言也、千五百年之間、天地亦是架漏過時、而人心亦是牽補度日、萬物何以阜蕃、而道何以常存乎。」

- (20) 筆者は、陳亮の言う「本領」とは「根本」という意味と理解する。陳亮は「秘書必謂漢唐並無此字本領、只是頭出頭沒」（『陳亮集』卷二八、「又乙巳秋書」／下冊・三五一頁）というが、この書簡が答えているところの朱子の陳亮宛の書簡には、「後來所謂英雄則未嘗有此功夫、但在利欲場中、頭出頭沒」とある。陳亮書の「本領」の語は、朱子書の「功夫」の語を承けている。このことを整合的に理解すれば、為政者の「工夫」の有無に、「道」が行われるかの根本（陳亮の言うところの「本領」）を見出す朱子に対して、陳亮は漢唐に「工夫」がないことについては朱子に同調しつつも、「工夫」とは別個に根本があつて、その根本は漢唐が三代と異ならないと説いていると思われる。「本領」が「根本」の意味と理解できることは以下を参照。『二程集』「程氏外書」卷十二／下冊・四二五頁「吾曾歷舉佛說與吾儒同處問。伊川先生曰、恁地同處雖多、只是本領不是、一齊差却。」

- (21) 「蹺欹」については以下を参照。『語類』（中華書局、一九八六年初版）卷二九、葉賀孫録、二冊・七三七頁「曰、便是這般所在、本是平直易看。只緣被人說得支蔓、故學者

多看不見這般所在。如一件物事相似、自恁地平正、更不著得些子跳歇。」

- (22) 陳亮は曹操の功業は「天理に暗合」したものとす。この主張は、君主の道德性の善惡と功績の大小とは必ずしも直結せず、利欲に基づく政治であつても、「天理」に「暗合」することがある、とした朱子の漢唐評価を踏まえつつ、このような朱子の漢唐に対する評価を、漢唐に劣るものとしての曹操に対して向け、漢唐をこれらから区別して、漢唐の三代に近いものとしての優位を確保しようとするものである。

- (23) 先行研究では、陳亮の「本領」の語に対する訳語として、「氣概」(庄司莊一)や「intelligence」(田浩)の語を用いる。
- (24) 『朱文公文集』卷三六、「答陳同甫」第六書、一五八三頁「老兄視漢高帝唐太宗之所為而察其心、果出於義耶、出於利耶、出於邪耶正耶。若高帝、則私意分數、猶未甚熾、然已不可謂之無。太宗之心、則吾恐其無一念之不出於人欲也。直以其能假仁借義、以行其私、而當時與之爭者、才能知術既出其下、又不知有仁義之可借、是以彼善於此而得以成其功耳。」

- (25) 『朱文公文集』卷三六、「答陳同甫」第八書、一五八三頁「……千五百年之間、正坐如此、所以只是架漏牽補、過了時日。其間雖或不無小康、而堯舜三王周公孔子所傳之道、未嘗一日得行於天地之間也。若論道之常存、却又初非人所能預。只是此箇自是亘古亘今常在不滅之物、雖千五百年被人作壞、終殄滅他不得耳。漢唐所謂賢君、何嘗有一分氣力

扶助得他耶。」

- (26) 『陳亮集』卷二八、致朱熹「又乙巳春書之一」/上冊・三四四頁「昔者、三皇五帝、與一世共安於無事。至堯而法度始定、為萬世法程。禹啓始以天下為一家、而自為之。有扈氏不以為是也、啓大戰而後勝之。湯放桀於南巢、而為商。武王伐紂、取之而為周。……夏商周之制度、定為三家、雖相因而未盡同也。」この主張は、「一節で説いた「變通の道」の考え方を引き継ぐものと考えられる。

- (27) 『朱文公文集』卷三六「答陳同甫」第八書、一五八五頁「來教云云、其說雖多、然其大概、不過推尊漢唐、以為與三代不異、貶抑三代、以為與漢唐不殊。而其所以為說者、則不過以為古今異宜、聖賢之事、不可盡以為法、但有救時之志、除亂之功、則其所為雖不盡合義理、亦自不妨為一世英雄。」
- (28) 『朱文公文集』卷三六、「答陳同甫」第八書、一五八六頁「來書心無常泯、法無常廢一段、乃一書之關鍵。……固無常泯常廢之理、但謂之無常泯、即是有時而泯矣。謂之無常廢、即是有時而廢矣。蓋天理人欲之並行、其或斷或續、固宜如此。至若論其本然之妙、則惟有天理而無人欲。是以聖人之教必欲其盡去人欲、而復全天理也。若心則欲其常不泯、而不恃其不常泯也。」

- (29) 『陳亮集』卷二八/下冊・三四八頁「其大概以為、三代做得盡者也。漢唐做不到盡者也。」

- (30) 『漢書』卷五六、董仲舒傳(中華書局、二四九八頁)「仲舒對曰……彊勉學問、則聞見博而知益明。彊勉行道、則德日起而大有功。」

(31) 『陳亮集』卷九、「勉彊行道大有功」／上・一〇一頁「武帝雄材大畧、傑視前古、其天資非不高也。上嘉唐虞、下樂商周、其立志非不大也。念典禮之漂墜、傷六經之散落、其意亦非止於求功夷狄、以快吾心而已。固將求功於聖人之典、以與三代比隆、而為不世出之主也。」

(32) 『陳亮集』卷九、「彊勉行道大有功」／上冊・一〇二頁「說者以為武帝好大喜功、而不知彊勉學問正心誠意、以從事乎形器之表、溥博淵泉而後出之、故仲舒欲以淵源正大之理、而易其膠膠擾擾之心、如柄鑿之不相入。此武帝所以終棄之諸侯也。」

(33) 董仲舒には「正其誼不謀其利、明其道不計其功」（『漢書』董仲舒傳）の言があり、朱子はこの語を『孟子』が説く「義利の辨」の思想を發展させたものとして高く評価する。（『語類』卷五一葉賀孫録、三冊・一二一八―一二一九頁）

(34) 『孟子』梁惠王下「王曰、寡人有疾、寡人好貨。對曰、昔者公劉好貨、詩云、乃積乃倉、乃裹餼糧、于橐于囊。思戢用光。弓矢斯張、干戈戚揚、爰方啟行。故居者有積倉、行者有裹糧也、然後可以爰方啟行。王如好貨、與百姓同之、於王何有。」

(35) 『孟子』梁惠王下の「好樂」は「勉彊行道大有功」の文には見えない。「勉彊行道大有功」の「聲色貨利」とあるうちの「聲」が「樂」に対応しているものと思われる。

(36) 『陳亮集』「問答下」（上冊・四一―四二頁）では、陳亮は「賞罰」によって天下を統御するのは「義利の弁」に抵触しないのか、と設問した上で、賞罰を行う君主の心が公

平であるか、自分のためであるかに、「義利の区別」があるのであって、賞罰自体を「利」によって誘導するものとは言えない、とする。これは公共の利益の為の打算を奨励するものと考えられる。

(37) 『語類』卷十九、林堯孫録（二冊・四三一―四三三頁）「孟子說得便粗、如云今樂猶古樂、太王好色、公劉好貨之類。」『語類』卷二四、一之録（二冊・五八九頁）「若太王好貨、好色等語、便欲比之孔子、便做病了、便見聖賢之分處。」

(38) 『孟子』梁惠王下「王如好色、與百姓同之、於王何有。」集注（『四書章句集注』、二二九―二三〇頁）「……其法似疏而實密、其事似易而實難。學者以身體之、則有以識其非曲學阿世之言、而知所以克己復禮之端矣。」